

# 道南地方の樹木病害虫

(広葉樹編 - 1)

館 和 夫

季報 54 号にひきつづいて、近年、当支場で林業相談として取扱った樹木病害虫のうち、ポプラ・ヤナギ類、ブナ・ナラ類を害するものについて、発生事例、生活史、防除方法などのあらましを述べる。なお、光珠内季報 36, 38 号(函館地方の緑化樹害虫)所載の害虫の一部については、記述を略したのものもあるので、それらについて知りたい方は参照していただきたい。

## ポプラ・ヤナギ類

かつて道内の山地や農廃地などの空地に、広く栽培されていた改良ポプラは、その後、凍霜害などの気象害や病虫害が多発したこともあって栽培規模が縮小され、今日では比較的手入れ管理の行きとどく、公園、緑地などの環境緑化樹として利用されている場合が多い。近年、道南地方で被害が見出され、問題になった病害虫には、つぎのようなものがある。

### 改良ポプラ(イタリーポプラ)

コウモリガ、ポプラハバチ、セグロシャチホコ、ゴマダラカミキリ、ヤナギシリジロゾウムシ、キトスポラ胴枯病、葉さび病

### ポプラ(クロポプラ)

ウスバカミキリ、キトスポラ胴枯病

### ドロノキ

ドロノキハムシ、ドロタマワタムシ

### ヤナギ類

オビカレハ、リンゴドクガ、ヤナギシリジロゾウムシ

これらのうち、**コウモリガ**(1969年7月、尻岸内)は、6、7月頃、改良ポプラなどの若木の根元に、雑草類から、移ってきた幼虫が穿入・加害するもので、穿入口は木くずが盛り上がったようになる。山地の植栽木に多い傾向がある。ふつう年1世代で、函館地方では8月頃羽化する。栽培地の除草につとめるほか、穿入孔に針金をさしこんで殺したり、50~100倍にうすめた殺虫剤を注入して防除する。**セグロシャチホコ**(1977年7月、函館)は、ときおり改良ポプラの若木などに大発生して、全葉を食いつくすほどの被害を与える。年2世代、幼虫は函館市付近では、6月上・中旬と、7月中~8月上旬頃に加害し、とくに盛夏期、中齢以後の食害量大きい。しかし、ポプラ類は生命力がつよいので、ふつうこの虫の被害だけで枯死することはないようである。幼虫の分散前に被害枝を剪定、焼却するか、スミチオン、マラソ

ン等の低毒性有機燐剤の 1000 倍液を散布して防除する。**ヤナギシリジロゾウムシ** (1975 年 10 ~ 12 月, 厚沢部) は, 成虫の体長 8 ~ 10mm, 鞘翅(さやばね)の下方が白いのが特徴である。ヤナギやポプラ類の枝や幹に穿入して加害する害虫で, ふつう年 1 世代であるが, 生活史は非常に不規則で, 被害木にはいつもいろいろな段階の虫態がみられる。防除方法は, 孔道の外へ排出された木屑を目じるしに, 孔内へ 50 ~ 100 倍に稀釈した殺虫剤を注入することであるが根絶はむずかしい。

**キトスポラ胴枯病**(粗皮病, ふらん病)はこれまで道南地方で植えられたポプラ林の大半に, 多少とも被害がみられるもので, 凍霜害や干害などの気象害や外傷を誘因として発生し, 全林が枯死するほどの被害をうける場合も少なくない。最近では, 1982 年 6 月に函館市新川町のポプラ並木や, 亀田地区の学校林の改良ポプラに顕著な被害が出て話題になった。病枝の被害部分は, はじめ少しくぼんでさめ肌状の柄子殻を生じ, それが枝を一周すると上部は完全に枯死する。この病害は, 病枝を湿潤な環境におくと, オレンジ色巻ひげ状の孢子角(写真 - 1)を噴出するので判別できる。予防のためには適地適木に留意するとともに, 客土, 深耕, 施肥, 剪定, 薬剤散布などの手入れ管理を充分に行って樹勢を強健に保つ必要がある。

## ブナ

道南地方のブナ林に周期的に大発生して顕著な被害を与える害虫として, **ブナアオシャチホコ**(写真 - 2)があげられる。1970 年 ~ 1971 年渡島・桧山管内に, 1981 年には函館市東部の山地一帯に大発生して話題をあつめた。幼虫は体長 45mm 位で全体に緑色をおび, 老熟すると濃緑色ないし赤色の背線が目立つようになる。8 月下旬から 9 月末頃までに地上において, 土中の浅いところに潜って蛹化するが, 大発生年の蛹化率はごく低く, 同じ地域で連年大発生することはまれである。ブナ林の害虫としては, 他にカレハガ類, イラガ類, アブラムシ類などがあるが被害量はわずかである。

ブナの病害のうち, 目だつもののひとつは**うどんこ病**(白渋病)である。広葉樹類の苗木または若木の病害として一般的なもので, 夏頃, 葉の表面に粉をまぶしたような白い菌体が現



写真 - 1 ポプラのキトスポラ胴枯病  
湿室処理により噴出したオレンジ  
色の孢子角(1982 年 7 月)函館



写真 - 2 ブナアオシャチホコの老熟幼虫  
(1981 年 8 月函館市蛾眉野)

れ、稍頭部の比較的若い葉がねじれたり縮んだりして生長がとまる。キノキサリン系水和剤(モレスタン)の3000倍液やDPC剤(カラセン)を早目に散布すると効果がある。その他、一般的な意味での樹病ではないが、ブナ林については、かねてからクワイカビ類による変色やアンブロシャビートルとよばれる一群のキクイムシ類による変色が問題とされており、当地方でもその対策として土場における散水や水中貯木、あるいは防腐剤の使用などが一般化して今日に至っている。

## ナラ類

ナラ類の病害虫については、近年、広葉樹林の施業や防災林の造成、自然公園の管理保全などの面からしだいに関心が高まってきている。

ナラ類に寄生するアブラムシ類のうち、目だつものはクリオオアブラムシ(1982年3月、函館、写真-3)である。ナラ類のほか、クリにも多く寄生する黒色の大きなアブラムシで、卵態で越冬する。夏期に数世代をくり返し、秋に生まれた有翅虫が樹上で交尾・産卵して生活環を完了する。冬から早春にかけて、剪定作業の折などに枝幹上のあまり陽のあたらないところに黒いあざ状の集団として産みつけられている越冬卵をみつけしだい潰すことが最良の防除法である。

オオトビモンシャチホコ(1977年6月、大沼)は、ときおり単木的に集団で発生し、ナラ類の葉を食う害虫で、年1世代。老熟幼虫は体長50mm位に達し、全体に黒色の部分が多いが、各環節の縁および側面は紅色をおひる。6月頃、加害中の幼虫を捕えて飼育すると、7月上旬頃一斉に土中に潜り、やや扁平な繭をつくって蛹化する。成虫は10~11月頃に現れて、食樹の樹皮や小枝上に産卵する。越冬卵は翌春孵化して集団で摂食をはじめめる。防除にはこの虫が比較のおそくまで群をつくる性質を利用して、早期に枝ごと切りおとして捕殺するか殺虫剤を散布するのがよいであろう。

コナラシギゾウムシ(1970年11月、函館)は、ナラ類の多い里山地帯の山林や公園などに、毎年のように発生して堅果(ドングリ)の中身(子葉)を食いあらし、稚樹の発生をさまたげる害虫である。10~11月頃、林内に落ちているドングリを拾ってみると、中が空で果面に小さな脱出孔のあいているものが多い。この虫の当地方における生活史については、まだ明らかでない点が多いが近縁種のクリシギゾウムシとおなじく、10月頃、堅果とともに地上に落下した幼虫は、土中で越冬し、翌



写真-3 ナラの樹幹に産みつけられたクリオオアブラムシの卵塊

左側に見えるのは無翅両性雌虫  
(1977年11月中旬、函館)



写真-4 カシワ苗のウドンコ病  
(1970年8月、函館)

年 9 月頃羽化するものとみられる。成虫は長い口吻を用いて生長期の堅果内部に穿孔・産卵するため、進行中の被害が外からわかりにくい特徴がある。ドングリを種子として用いる場合には、落下しだいできるだけ早く拾いあつめて水浸・選果する必要がある。また、可能な場合は、成虫の羽化期に有機燐剤等の殺虫剤を反復散布することも、この虫の発生を少なくし、産卵を防止する上で有効とおもわれる。

ナラ類の病害としては、夏から秋にかけて苗畑を中心に発生するうどんこ病（写真 - 4）が目につく。この病気は病原菌の分生孢子時代の菌体が葉の表面にひろがって、白い粉をまぶしたようにみえるもので、梢頭や病葉の一部は萎縮したり、変形したりして生長がとまることが多い。防除方法は、前述のブナのうどんこ病に準ずるほか、落葉や罹病葉をあつめて焼却することも有効とされている。

（道南支場）